赤いトンボが雪空を飛ぶ

戦場の見習い天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤いトンボが雪空を飛ぶ

【Ｎコード】
Ｎ６９２５Ｚ

【作者名】
戦場の見習い天使

【あらすじ】
現代に残る大日本帝國。
世界最強の海軍を持ち、数々の戦いを勝ちあがってきた国。そんな大日本帝國がハルケギニアに転移してしまったら？
という仮想のお話をある一人のエースパイロットと『雪風』の異名を持つ少女を中心に描くお話。（だといいね本当に。）
基本的に気が向いた時にしか更新しません。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　プロローグ

大日本帝國海軍　第三艦隊旗艦　航空母艦紅龍

「艦長。敵航空隊は全滅しました。こちらの被害一部の機が被弾しただけです。
敵飛行場への攻撃も成功しています。」

「そうか。よくやってくれたよ。これで朝鮮の空軍は軒並み壊滅。
我々の勝利は近いな。」

「はぁ・・・艦長。・・・そういえば今日は・・・」

「クリスマス。か？そうだな・・・今日ぐらいは戦争やめにして祝わせてくれないかねぇ。敵さんも祝いたいだろうに。」

「艦長って親バカですか？外、雪降っていますよ。」

「親バカで悪かったな・・・今日の飯は豪勢だよ。早く行こうじゃないか。」

「艦長。メリークリスマス。」

「メリークリスマス。」

誰かとこんなたわいない話をする。
戦争の中でも、こんな平和な日常だった。
俺の、まだ仲間がいて、親友がいて、まだ幸せだった時の記憶。

一年後。
この世界には航空母艦紅龍も、あの気さくな艦長も、たくさんの仲間も。
みんなこの世にいなかった。
朝鮮地方、中国は日本に降伏した。
だが、その日、ロシアとアメリカからミサイルが発射された。
全ての防衛、撃墜に成功するが、その日にロシアとアメリカは宣戦布告。

それから一年後。
激しい戦いを潜り抜けて、沢山いたはずの仲間は、守りたかった仲間は、
この世からいなかった。
日本は戦争には勝った。
多大な賠償金、敵国のほとんどの軍備の禁止。そんな講和条約でさえ通ってしまうまでに敵国は打ちのめされた。

第三次世界大戦。
アメリカ、ロシアを筆頭とする連合軍は日本、ヨーロッパ勢、満州国などを筆頭とする枢軸軍に宣戦布告。大量の核爆弾が発射された。
だが枢軸軍はそのほとんどを防御。
その後の作戦も、ワシントン・D・Cに発射された水爆や無差別爆撃によりアメリカに闘う力は残っていなかった。ロシアもまた同じ結果となった。

だがあまりにも最初に発射されたミサイルが多かったために核を運ぶための大型ミサイルを優先的に撃墜していった結果、小型ミサイルの撃墜が追いつかず、軍基地に突入する形となった。
その結果、大日本帝國は沢山の兵力を失う形となった。

あのクリスマスの夜。
俺は目の前で、仲間がミサイルに直撃して木端微塵になるところを見た。
目の前で俺を尊敬していた仲間が撃墜されるのを見た。
俺の中の何かが壊れる音がした。俺には耐えられなかった。
俺が空母艦載機のパイロットから転属願いを出したのは、その年の内だったと思う。
そうして、撃墜機２４機のエースパイロットは陸戦隊に異動となった。

あれから、何年が経つのだろうか。
一日一日が長く感じられる。
もしも俺があいつらに会えるのなら、最初に何を言うのだろうか。
その言葉が見つかるまでは。
俺の心が癒えるまでは。
また心から守りたい物が見つかるまでは。
俺はあのＪ－２０の操縦桿を握れそうに無い。

俺は近頃おかしな夢を見た。
知らない地で、道に迷い、どこかのゴロツキどもに絡まれ、それをぶった切っていく。
その国は日本じゃあなかった。
魔法があって、バカみたいな身分制度。
普通ならすぐ忘れるはずの夢なのに、何故かその夢だけは頭からこびり付いて離れなかった。

起きて艦隊で定められている訓練をする。
走りこみ、腕立て伏せ、腹筋、背筋、射撃訓練。
へばる奴らがいる中、俺はその重いメニューを難なくこなす。
俺はやっぱり、あの夢の事を考えていた。

大日本帝國が太陽系第三惑星地球から消滅したのは、その一ヵ月後の事だった。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　プロローグ（後書き）

まだボカやっちゃった。
いつも連載している二作品に行き詰ったら書くみたいな話にしたいです。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　少し考えてみる。

原発事故について
電力会社上層部、官僚、政治家の腐敗を国と国民と天皇陛下が許さなかった。
なので有事への対策もしっかりされた。
結果、事故は発生したものの、史実の東海村ＪＣＯ臨界事故の事故程度の被害で済んだ。
その後反原発運動が繰り広げられることになるが、
原子力に頼りきりな電力事情や転移でうやむやに。

東日本大震災について
史実通り。
地震発生の知らせを受けた軍はすぐさま東北に展開。
後に述べる海上護衛隊、海軍による救助も行われた。
なので若干死者が少ない。
国としての課題は、転移の対策の他に、東北の復興もあるので困るところ。
政治が史実の日本よりしっかりしているので、復興は史実よりは早いと考えられる。

軍について
帝國海軍は戦艦４、空母８、巡洋艦２４、駆逐艦６０、強襲揚陸艦２４、潜水艦６０を保有。
（掃海艇やら病院船とかは別）
何故戦艦が残っているかというと、艦体が大きいのでＶＬＳとか沢山積めたり、イージス艦の強化版みたいな使い方をする。
あと少しは男のロマンも入っている。
艦上機はＪ－２０。

高望みな新技術はやめて、Ｆ－１８にステルス性能を付加して、航続距離を伸ばした。武装もだいたいＦ－１８と同じだったりする。
艦上ヘリは大体シーホークだったりする。
電子戦用に日本版ＥＡ－６みたいな物も搭載している。
あと、Ａ－１０神の艦上機版があるとか無いとか。
陸軍は省く（何）
あと日本国籍の艦船の護衛、日本周辺のパトロール、遭難者救助のために海上護衛隊が存在する。護衛艦は海保と何か似ている。速度なんかは違うけど。

マスコミ
政府の抜き打ち検査だったりいろいろあったりする。
だって機密情報垂れ流しにされたらアレなので。

左翼、共産主義者、在日は？
治安維持法の規則軟化版がある。
あと特高で取り締まったりする。
そのためそういう人間にとっては住みにくいかも。
日本国籍はそう簡単には取れない。当たり前だ。

満州国について。
史実どおり建国。
対アメリカ戦後のソ連戦に参戦している。
基本的に建国時と領土はほぼ同じ。
親日国の一つで、農業や鉱業などが盛んである。
最近では日本の高い技術力を持った企業の移転が進んでいる。
移転後の日本にとっては食糧の輸出などで以前より親密な関係になる。
人口は大体４億程度。
軍などは陸軍と空軍のみで、日本軍と装備がほぼ同一。

海軍に関しては本編参照。

本当の話厄介な所として朝鮮半島を入れようと思ったが、問題解決してもあそこは存在自体（以下検閲により削除されました）

赤いトンボが雪空を飛ぶ　少し考えてみる。（後書き）

中途半端なところに入れてみる。
他にも何かございましたらお願いします。
１２．２５　色々と修正。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

２０１２年３月１２日５時３１分。
大日本帝國は突如消滅した。
同時に満州国、帝国の植民地として統治していた南洋諸島も消滅。
いつの間にか海になっていた。
外洋に出ていた大日本帝國国籍、満州国国籍の船舶、艦隊も消滅。
寄港していた外国の船舶まで巻き込まれ姿を消した。

始まりは地震だった。
地球のほぼ全域で観測された震度３程度の地震。
特に被害などは無かった。
だが、その時から満州国、南洋諸島、国内以外の通信回線が不通となった。
外洋に出ていたはずの船舶がいつの間にか日本本土に戻っている。
ちなみにパソコンなどのサーバは有事にインターネットなどへのサイバー攻撃時の際に国の事業で定期的に上書き保存されるデータを使用したのでそのままの状態だった。

それでも国内の混乱は避けられなかった。
ＧＰＳが使えなかったり、国際電話の不通。貿易会社などはその日の業務を中止した位だ。
それは外国人、国民の暴動などにつながることになる。

政府が声明を出したのはそれから５時間後。
「満州国、日本本土、南洋諸島以外の連絡が取れない状態になっている。
何らかの理由があると思われる。
大日本帝國軍は今後起きる可能性のある暴動の阻止や他地方との連

絡に努めよ
帝國臣民、満州国民の皆様は普段どおりの生活を冷静かつ出来る範囲で行うように」

日本人たちの行動はいたって冷静だった。
学校ではいつものように授業が行われ、一部の会社ののぞく会社では不通のように業務が行われた。
政府は近辺の状態確認のために大日本帝國海軍第三艦隊、第四艦隊、第五艦隊、第六艦隊が出港。
資源の備蓄状態や満州国や南洋諸島で取れる資源の確認などが行われ、元々２０１２年３月に打ち上げられる予定だったＧＰＳ衛星の完成を早めて出来るだけ早く打ち上げることに決定した。
外国人たちは暴動を起こそうとしたが、特高に取り押さえられた。
結果、ほとんど何事も無かったような生活になった。

だが首相官邸では、日本や満州国を取り巻く厳しい現実が明らかとなった。
資源の備蓄は昔からやっていることで、原油、石炭、天然ガスの備蓄は国内消費量の一年分。その他資源で特に重要な鉄やゴムなどは半年、その他の資源も三ヶ月分はあった。
だが食料はどうしようもなかった。昔より自給率は上がっていたが。
さらに原子力発電の増強や自然エネルギー発電の増加で電力は増えたといえ余裕が無い。
資源だって逆を言えばそれくらいしかないということになる。
つまり、大日本帝國の滅亡までのタイムリミットは、長く見積もって二ヶ月ということになる。
そして、現在大日本帝國がある位置についてもとんでもないことが発覚した。

「異世界に転移！何故そのようなことが起こるのかね？」

そう聞くのは内閣総理大臣の加地貫太郎である。
専門家が言うには、地球上の大気とはＣＯ２の量が違うこと、日本の磁場などの乱れなどから、大日本帝國は異世界に転移してしまったのではという予測が立てられた。
そして、その決め手となったのは海上護衛隊からの通信だった。

「海上護衛隊から入電です。『我、謎ノ大陸ヲ発見セリ』」

次の日、大日本帝國、満州国は、次の事を発表した。

・大日本帝國本土、大日本帝國沖縄台湾地方、大日本帝國南洋諸島、満州国は地球ではない別の場所に転移した可能性が高い。
・海上護衛隊は謎の大陸を発見した。
・資源、食糧の備蓄が少ないこと。
・謎の大陸については、その方角に向かっていた大日本帝國第三艦隊の艦載機を使用して偵察を行う。戦闘はできるだけ控え、危険が無いようなら陸戦隊の上陸を行って調査する。
・満州国の国境で海に面しているところが出てきたため、解体待ちの駆逐艦などを使用して急遽海軍を創設する。

さすがに日本は大混乱になった。政府からの声明にマスコミもこぞって取り上げた。
だが、これは大日本帝國、満州国を揺るがす出来事の全ての始まりに過ぎなかったのだ。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？（後書き）

いわゆる導入編というところです。
主人公が出てくるのはもう少し先になりそうです。
追記　読者様からのご感想の中に「チョンいらないだろ」というご感想があったのですが、完全な誤字です。
申し訳ございません。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

「司令。では訓示をお願いします。」

声をかけられる黒い髪をした長身の男。
彼の名は石嶺　日向。若くして第三艦隊司令長官となった海軍少将である。

「全く・・・面倒くさいなぁ・・・」

そう言って壇上に進み出る。
でも、彼の目は決して面倒くさそうな目ではなかった。

「君たちに問う。君たちはこの国が好きか？」

そう問うと、はいと言う大きな返答。

「そうか。今、大日本帝國は存亡の危機に瀕しているのは君たちもご存知の通りだ。
ここで我々がやらねば、皇国は飢え死にする。
君らの大切な人も、俺の大切な人もだ。
俺たちがやらないとこの国は救えない。
君らがこの国を救うのだ。
例え何があろうとも、責任を持ち、帝國海軍の誇りを持って、礼儀正しく、そして、世界最強の船乗りの力を世界に示せ！
長い話は嫌いだ！以上にする！」

普段とんでもない怠け者そして面倒くさがりやで有名な石嶺だったが、この日は違った。

まるで覚悟を決めたような、肝の据わった目。
そしてそれに共鳴して、第三艦隊の士気は最高潮に上昇する。
数日後、第三艦隊は謎の大陸から大体７５ｋｍの所に来ていた。
航空母艦飛龍の会議室では、今後の会議が行われていた。

「司令。我艦隊の任務は大陸の視察であります。ここで停泊して、偵察機を出すことを進言します。」

海軍に入ってから数十年がたつであろう白髪の男。第三艦隊参謀長、沢井が提案する。

「まあこいらでいいだろう。偵察機を発艦させよう。」

第三艦隊の旗艦、赤城級空母飛龍から偵察隊が発艦する。
赤城級空母は皇紀２６５２年から製造された世界最大の原子力空母。
艦上機を１２０機も搭載することが出来、１２２．０００トンの排水量を持つ。
飛龍の他に赤城、加賀、蒼龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、鳳翔と８艦が存在する。
ちなみに紅龍が同系艦として存在していたが２０１０年の第三次世界大戦時の開戦後すぐのミサイル攻撃により沈没している。
偵察機は編隊を組むと、西の方角へ動き出した。

「機長。暇ですね・・・」

偵察機の乗員。

「そんなこと言っちゃあかんよ。俺たちの偵察結果次第でうまくい

けば皇国が救われるのだろう？」

別の乗員が声を上げる。

「前方向に陸地が視認できます！」

そこには黒い砂をした砂浜が見えてくる。

奥には森がある。

ヘリは方向転換して陸地へと向かう。

「ここが・・・」

少しずつ近づいてくる陸地。

だが、彼らはとんでもないものを目の当たりにした。

「見てください！下に・・・豚でしょうか？いや豚にしては少し大きいですね。」

「こちら飛龍偵察機隊、謎の大陸に正体不明の生物を確認。調査を続行する。」

偵察機隊は生物の画像を撮影して別の箇所を調査する。

しばらく飛んだところだろうか。

「三時方向に村でしょうか？建物が見えます。」

「うむ。だが良く見てみろ・・・」

「残骸ですね。何かに流されたのでしょうか・・・」

「もう少し低く飛んで人がいないか調べるぞ。」
低空飛行に移る。人の姿は全く確認できない。
「仕方ないな・・・元の高度に戻り方向を転換するぞ。」
方向を転換して、飛行する。
「前方に町を確認！この大陸には・・・」
「文明があり、人が生活しているか。」
「町を調査するぞ。」
高度を下げる。町の中にいる人は驚いて上を見ている。
服装は中世のヨーロッパに似ている。文明もそのくらいだ。
杖を持っている人もいる。
だが、事件は突然起こった。
「機長！前方向に火の玉が一つ飛んできます！」
突然火の玉が飛んできたのだ。
「回避するぞ！全く！ここはどこのファンタジー世界だよ！」
何とか回避に成功する。だが次から次へと火の玉が放たれていく。
慌てる偵察隊。
「高空へ上がるぞ！」

「こちら飛龍偵察機隊。人間の町を発見。文明はヨーロッパ中期レベルかと思われる。
町にて攻撃を受けり。火の玉が飛来したが回避し、被害なし。報復射撃の許可を求む。」

しばらくして返答が帰ってくる。

「こちら飛龍。報復射撃は許可できない。直ちに母艦に帰投せよ。」

通信員からそのように言われる。
残念そうな顔をして機長が言う。

「そうか・・・こちら1番機。全機反転。母艦に帰投する。」

だが試練はそれだけではなかった。

「こちら4番機！後方より飛行物体飛来！」

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？（後書き）

何か俺って気が向いたときと気が向いていないときの執筆スピードが違いすぎるような気がする。
別に書いている小説の更新をするので更新はまた今度になりそうです。と思ったけどすぐ書いてしまっている件について

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

空母飛龍の艦内のどこかには、ピアノが置いてある部屋がある。
少しの人物しか知らない、秘密の部屋。
ピアノの他には数個の椅子とテレビとＤＶＤレコーダー位しか置いてないその部屋のピアノからは、いつもある曲が流れる。
悲しくて、綺麗な曲。
彼は、人が来ているのに気付かず、その曲を弾き続けていた。
やがてその曲が終わり、彼がこちらに気付く。
長い金髪に綺麗な顔立ち。だがその目はなんだか悲しげで。
彼、谷澤勇樹がこちらに気付き、敬礼をする。
石嶺は答礼をすると、話し始める。

「谷澤。またここに居たのか。」

「悪いですか？」

「まあ別に悪くは無いが・・・このままじゃあこの海軍の七不思議になるぞ？」

「どういう？」

「航空母艦飛龍にいつも同じ曲をピアノで演奏している亡霊が居るって。」

「亡霊・・・ですか。まあこんな秘密基地みたいなところから流れてきちゃあ誰もわかりませんよね。」

仕方が無いだろうと言った顔で彼は笑う。

「またその曲か・・・それに何時までもあの事を考えていたら・・・」

「『前に進めない』ですか？その言葉は耳にたこができる位聞きましたよ。司令。それに・・・」

「『いつかは直る』だろ？その何時かは何時なんだよ・・・若葉のやつはもう直りやがったのにさ。」

「あの人は能天気すぎます。それに司令はあの人に甘いですよ。カップルじゃああるまいし。死亡フラグが立ちますよ。」

「まあ・・・家族だからな。」

「さてと・・・何の用ですか？」

「特に何も。曲を聴きに来ただけだ。」

「そんな人に聞いて貰えるほどうまくは無いと思います。」

そんな小さい用なら来ないで下さいと言いたそうな顔をして言う谷澤。

「謙遜するな。俺は十分うまいと思うがな。」

「まあ、あいつが聞いたら、『まだまだ』と言われそうですね。」

「はぁ・・・菅原はそれほどピアノにうるさかったのか・・・」

続ける石嶺。

「後。偵察隊が何もないと言えば、３，４日後に大陸に上陸する。お前も付いて来い。」

「それを先に言いましょうよ。というかそれが用なんじゃあ・・・」

部屋を出て艦内通路に出る。しばらくすると、伝令がやってくる。

「何やっていたんですか司令！緊急事態です！」

「何だと！」

「言わんこっちゃ無い。司令頑張れー」

嫌な顔をして棒読みで言う谷澤。

「谷澤、後で呼び出し。司令室に。さて行くぞ。」

「中尉はもういませんよ。司令。お気の毒に。」

いつの間にかに逃げてしまった谷澤の事を指して笑いながら言う。

「伝令。お前もだ。後で呼び出しておけ。」

伝令が『えっ』というがときすでに遅し。

急ぎ足で歩く二人。

「あれは・・・竜？」

飛龍偵察隊では、突然現れた何匹もの赤い生物に驚く。
竜のような赤い生物の上には騎士が乗っていた。
赤い竜は炎を吐いてくる。

「炎を吐いてきました！どうやら、撃墜する気です！」

「回避しろ！正当防衛だ！仕方ない！こちら一番機！火器の使用を独断で許可する！」

ブローニングＭ２機関銃が敵竜に向かって構えられる。

「メドゥーサの発射準備終了！撃てっ！」

ブローニングＭ２機関銃が毎分８５０発の勢いで弾を吐き出す。
竜は血を吐いて落ちていく。
騎士に弾が掠めると、騎士の片腕は無くなっていた。
あっというまに２匹の竜を撃墜する。
他のヘリも攻撃を始める。
仲間たちがあっという間に落ちていくのを見て、竜たちは怖気付いたのか撤退を始めた。

「竜たちが撤退していきます。」

「こちらも撤退するぞ。」

だが水色の竜がこちらを追ってくる。なんだかさっきの赤い龍より早そうな龍だ。

「あの竜はどうしますか？」
おそらく追跡する気だろう。
もし母艦の位置を嗅ぎ付けられたら・・・
「仕方が無い。撃墜しろ。」
ヘリが射撃を再開し、水色の竜は血を吹いて騎士と一緒に地面に落ちていった。
「これで追手も居なくなった筈だ。」
そして、偵察隊は母艦へ戻っていくのだった。

「なるほど・・・そのようなことがあったとは・・・」
呟く石嶺。その横には谷澤と伝令が正座させられていた。
「まあいい。偵察の結果人間が存在し、正体不明な生物の存在、文明の件、そして、国が存在すると言うことか・・・」
「まあ、そういう風に考えたほうがいいですね。」
もう足がしびれたんだと言いたそうな顔をしながらそう言う谷澤。
「厄介だな・・・領海の侵犯、さらに領空の侵犯か・・・」
完全に正座の件は無視して言う。

「上陸の件はどうするんだ？」

尋ねる谷澤。

「変更はしない。だが、もしもの時・・・」

「その場合はその国に攻撃を加えることが出来るように準備しておけ。さてと、上陸準備だ。偵察隊は野営や上陸に適した場所を探してくれ。」

こう言った石嶺は、こう一言付け加えるのも忘れなかった。

「あ、その二人はあと一時間このままな。」

二人はこの世の終わりのような顔をしてお互いを見つめた。

後で司令室が出てきた二人が歩けないくらいにフラフラだったのは言うまでも無い。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？（後書き）

ピアノの曲は「戦場のメリークリスマス」です。
メドゥーサ＝ブローニングＭ２重機関銃の別名です。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

私はおかしな夢を見た。
おかしな格好をした人が貴族に決闘を挑むという夢。
きっと任務のし過ぎなんだろう。
普通なら忘れてしまう夢が、何故か頭の中から離れなかった。
部屋の中で本を読んでみるが、何故か本の内容が頭に入らない。
せっかくの虚無の曜日なのに。
どんどんとドアをたたく音がする。
うるさい。読書の邪魔になる。

『サイレント（消音）』

これでゆっくり本を読めるかと思った。
でも現実はそう甘くは無い。
ドアが開く音。『解錠（アンロック）』を使ったらしい。
音は聞こえないけど、彼女の言いたいことは大体分かる。
どうせ、相手を見つけたから着いてこいだとか、そんな感じだろう。
でも、数少ない親友の頼みを無視することは出来ない。と考えていたら、本を取られた。
仕方が無いので、呪文を解く。そうしないと本は返してもらえないだろう。

「タバサ！行くわよ！」

本を返される。
どうせまた相手を見つけたのだろう。
それでその相手が遠いところに行ってしまったのだろう。

「・・・また着いて来い？」

聞いてみる。するとキュルケは、

「そうだけど？」

それはどうにかならないのか。私の貴重な時間がガラガラと音を立てて崩れ去っていく。

「・・・何処まで行くの？」

「トリスタニアまで。」

あんな遠いところまで・・・面倒だ・・・

「はぁ・・・ＧＰＳなんかあったら助かるのになぁ・・・・」

例の秘密の部屋でぼやく石嶺。ピアノの席に座る。

「測量だってそう時代遅れな技術じゃあなかったと思いますけど・・・それに無いものねだりしたって・・・」

椅子を全て占領して寝転がった状態の谷澤が答える。

「勇樹もにーにもずるい！私にも椅子よこせ！」

椅子に座ることが出来ず壁に寄りかかる黒い髪の美人。彼女は石嶺の妹、若葉。

「「お気の毒ですー」」

二人の心が一つになる。もちろん棒読み。

「二人共地獄に落ちろ・・・」

泣きそうな声で言う若葉。

「さてと・・・作戦書によると作戦決行は明日か・・・」

何事も無かったように作戦書を読み上げる石嶺。

「上陸位置は北西８５ｋｍ、上陸兵力は１０００人か・・・」

「それに司令と護衛・・・はぁ・・・俺も行くのか面倒くさい・・・」

ぼやく谷澤。

「二人とも賊に襲われて死んじまえ」

「若葉。もうここまでにしておけ。これ以上はお呼び出しだぞ？」

『お呼び出し』という言葉で黙りこくる若葉。

「作戦によると揚陸艇で歩兵を積んだ歩兵輸送トラックを揚陸させて、道を進むと。

その後町があれば情報の収集を行って、国や町の代表者やここら辺の地理を聞きだすと。

いざとなったら戦闘。謎の生物や火の玉の件もあるからな・・・油断はしないで欲しいな。」

「文明が無かったら上陸後の道の敷設も自分でやらないといけないからね。楽でいいよね。」

道が無ければよかったのにという顔をする若葉。

「まあ、そううまくはいかないだろうし、いったとしてもこの身なりじゃあな・・・」

白い士官服を指して呟く谷澤。

「そんな中世の服を短時間で作る化け物じみた能力はこの艦隊にはないよ。お気の毒に。」

若葉が棒読みで話す。

「帝國海軍の七不思議にどこかの艦隊に棒読みでとんでもないことを棒読みで呟くやつがいるって噂が・・・」

この人たちの相手は出来そうにない。速攻で部屋から出る。

向かった先は、航空機の格納庫。

そこには、ヘリやＪ２０が所狭しと並んでいる。

谷澤は整備器具を持つと、整備員の仲間たちと航空機の整備を始めた。

数十分経つと、ほぼ全ての航空機の整備が終わり、整備員たちは自分の部屋に戻っていく。

基本的に上官である谷澤は最終確認を終えると、ある戦闘機の所に

歩く。
その飛行機には尾翼に赤いトンボのマーク。撃墜数を表わす赤い星。
主翼には日の丸。
普段全く飛んでいないにもかかわらず、そのＪ２０は他の航空機のように綺麗に整備されていた。

「全く・・・こいつが飛ぶ日は何時来るのだろうな・・・」

彼は自虐的に笑うと、格納庫を後にした。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？（後書き）

次話に上陸して、その話のうちかその次にある原作キャラとの遭遇をしたい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6925z/

赤いトンボが雪空を飛ぶ

2011年12月26日20時50分発行